

ミチビキエンゼル

校長 武井 正明

久々に涼しい朝になった先週の木曜日。

車中のニュース。良き相談相手として、かなりの%で挙がっていたのが生成AIだと聞いた。「1日3時間はAIに相談する。欠かせない存在」と若い女性が話していた。

確かに吉中でも新学期前のICT研修で、文書作成などでAIを上手に使いこなしている先生方が予想以上に多いことが分かった。AIが褒めてくれるから自己肯定感が上がる、という意見もあった。自分はどんどん時代から取り残されていく、困ったな…。

そしてふと思った。

藤子不二雄のドラえもんに「ミチビキエンゼル」というのがある。テルテル坊主みたいな、ちょっと人を小バかにした風貌のミチビキエンゼルは、それを手にはめると、どんな問い掛けに対しても、その人に最善の行動を教えて導いてくれる、というもの。

そして最初は調子よく回っているが、次第にあまりにもミチビキエンゼルに頼りすぎてしまって「最善の行動のためは使用者以外の迷惑は全く考慮しない」性質から、しかも傲慢さも増して最終的には、却って周囲に様々なトラブルを巻き起こしてしまう、というものだった。



聞きながら、AIはこれに似たものがあるなと思った。

今のSNSや様々な便利品も、あくまでツールなのだという認識を使用者自身がしっかり持っていないと、自分の思考や行動の総てを支配されてしまう怖れがある。

「藤子不二雄」は皆さんご存じのとおり二人でひとつのコンビ名。「ドラえもん」の作者の藤本弘さんは、50年以上昔、既にこの怖さについて、警鐘を鳴らしていたということになる。ドラえもんの道具は、そういうのがけっこうある。

藤本さんの相方、安孫子素雄さんも、未来を暗示した作品を多数発表している。

漫画界の巨匠、手塚治虫は、どんな難病でも治してしまう無免許医師ブラックジャックと安楽死を支持するドクター・キリコとの対比を通して、生命について読者に深く考えさせた。きっと今の漫画からも、未来を予見するものが数多くあるはずだ。

先日1年3組の国語授業「伊曾保物語」で「鳥もち」が出てきた。

まさか知っている生徒はいないだろうな、と想像していたらなんと「知ってる!!」の声。

ドラえもんに出てきたという。調べてみると、あったあった「テレビとりもち」

テレビ画面に突っ込むと、映った食べ物や人物などにくっついて画面の外に引っ張り出すことができるという、なんとも夢のある道具。こんなのあったらいいよねえ…。

久しぶりにドラえもん、また読んでみようかな。